東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

The Current State of JSL Support at ISS

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-04-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 秋森,久美子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173835

国際中等教育研究　第15号 p.203 ～ 207
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

国際中等教育学校における JSL サポートの現在地

The Current State of JSL Support at ISS

JSL・交流委員会（JSL）　秋森 久美子

はじめに

本校ではこれまで多くの「海外生活体験生徒」を受け入れてきたが、開校から 15 年たち、「海外体験生徒」だけでなく「国内インターナショナルスクール出身生徒」も多く入学するようになった。しかし、特に大きく開校当初からの JSL サポートのあり方が変容する分岐点となったのは、新入生として入学してくる生徒たちの変化というよりも、1 年生の 9 月から 6 年生の 4 月まで、毎年 4 月と 9 月に編入してくる数十人の「帰国生徒」たちへ適切な対応の必要性が出てきたことにある。義務教育の前期課程での編入生への対応と、進級するために必要な単位修得をして高校卒業を目指さなくてはならない後期課程での編入生への対応はかなり大きく違ってくる。中等教育学校であるので前期課程の生徒は本校への編入の時点で、たとえ日本語の力が不足していたとしても、高校（後期課程）への進学はできるが、後期課程で編入してきた生徒は、日本語運用力の程度にかかわらず、編入したその日から、英語の授業以外はすべて日本語で行われる高校の授業やレポート課題、プレゼンテーションなどに取り組まなくてはならない。学年も、滞在していた国も言語・文化的背景もニーズも実に多様なこれらの生徒に対する支援を、学校としてどのようにしたらよいか、どのような体制をとればよいのかをここ数年間模索した結果、現在は、本校卒業生や関係者で構成する「JSL サポーターズ」の協力を得て、毎日放課後 JSL サポート教室を実施するという形の支援体制に至っている。

１章 「JSL サポーターズ」支援体制に至るまでの経緯

国際中等教育学校として開校した 1 年目は、1 回生の「外国語作文と日本語作文・日本語での面接を課す検査方式」（以下「A 方式」と呼ぶ）の入試を受けて入学して来た生徒のうち、日本語での日常会話には困らない（入試では日本語での面接が課せられているので、ほとんどの生徒はこの点はクリアしている）が、日本語での教科学習となるとうまく対応できていない生徒のみが支援の対象であったため、その人数は限られていた。しかし 2 年目、3 年目と経過するにつれ、A 方式の新入生に加え、一年に 2 回各学年で編入生（編入試は海外からの帰国生のみ、A 方式で受検）を数名受け入れるので、支援が必要となる対象人数は当然ながら少しずつ確実に増えていく。その結果、彼らの支援を担当する教員側もサポート対象生徒が増えれば、それだけ指導する時間の確保が必要となるのだが、学校内の人的資源も指導に費やす時間も限られている。それでも対象者が前期課程の間は、日本語での学習がうまく出来ないことで授業について行けず進級できないという心配はないので、後期課程になるまでにできるだけ自分で学習できるようになることを目指しながら、ある程度時間をかけたサポートは可能であった。また、前期課程（中学）での学習内容は後期課程（高校）に比べれば易しく、JSL の支援に携わる教員は支援対象生徒に教える分野がたとえ自分の専門教科

でなくとも、教科書を基本にわかりやすい日本語を使って説明しながら、十分指導することは出来ていた。考えていかなければならない課題が次々と見つかったのは 1 回生、2 回生が後期課程に進んでからである。

2011 年 1 回生が 5 年生の時、中国からの帰国生徒 1 名が本校へ編入した。現地校ではすべて中国語で教育を受けており、そのまま中国での大学進学を考えていたこともあって、日本語で学校教育を受けた経験は皆無であった。家庭では中国語が主で、保護者の事情で日本に急遽帰国することが決まってから、父親から日本語を習い始め、日本語学校にも通ったという背景を持っていた。この生徒への支援は、時間割を調整し、毎週金曜日 5 校時に JSL 学習サポートを定期的に実施した。また、東京学芸大学に指導補助をしてくれる大学院生の派遣を要請し、学期末考査前一ヶ月間週 2 回、放課後に集中的サポートを行った。この生徒の場合は、①母国語である中国語でしっかり現地校で学習しており、学年相当以上の十分な知識や考える力を身につけていたこと、②漢字の使用に全く抵抗がなく、中国語から日本の教科書で使われている漢字の意味を想像でき、文章を読むのにそれほど困らないこと、③「何がわからないか」を自分できちんと把握し、自分で「わからないこと」を周囲に質問したり、調べたりする「自己解決能力」を持っていたこと、④生徒本人に日本の大学に進学したいという目標があったこと、というこれら 4 つの点が功を奏して、2 年間支援を続けた結果、本人の努力もあり、単位を 1 つも落とすことなく卒業し、第一志望の大学に進学した。この生徒の場合はたまたま第二外国語を履修せず、その時間に JSL 学習のサポートを受けることが偶然出来たのだが、このような対応がいつも可能とは限らず、ほとんど多くの場合は放課後のみの支援となる。2011 年度の JSL サポート対象者は、この生徒以外にも前期課程で数名いたが、振り返ってみると、この生徒を 6 年生に進級させるにはどのような支援体制が望ましいかを常に模索していた。この生徒を含めてそれまでに様々な背景を持つ生徒への支援を実施した経験から JSL 委員会（現在は「JSL・交流委員会」という名称となるが、ここではその当時の「JSL 委員会」を使用）が学んだことは、以下の通りである。

①継続的に学ぶ場の確保

JSL 委員会の先生方からは、教員側の仕事もあるので、日を決めて JSL 学習サポート教室（以下「JSL サポート教室」と呼ぶ）を実施したらよいのではないかとの提案もあったが、それはあくまでも教員側の都合である。実施日を決めるのは適当ではない。なぜならば、学ぶ主体は生徒であり、生徒によっては放課後に部活動、委員会、行事の準備、学年ごとのイベント、習い事等などがあり、その日程は生徒によって異なるだろうし、そのような場面もまた生徒が日本語での学習能力を養うのに役立つ。それらをすべて排除してまで JSL サポート教室に来ることを強制するのは、逆に生徒のやる気をそぐ結果にもつながる。あくまでも生徒の自主的な学習を促す方向で進めていくのが望ましい。毎日同じ場所で放課後開講し、困ったときにはいつでも来てアドバイスが得られる状況を作る。

②JSL サポート教室学習指導支援者の確保

JSL サポート教室は，毎日放課後開講するのが望ましい。しかし放課後は会議，研修会，担任学級生徒の面接指導等，委員会指導，行事の準備もあるため，JSL 委員会担当教員がサポートのすべてに関わることは，時間的に無理という現状がある。しかし，サポートを必要としている生徒は，学校側の都合とは別に，毎日の継続的な指導が必要な状態にある。放課後いつでも参加でき，学習のサ

ポートをしてもらえる場があることは，対象生徒にとって日本語での授業を受けることや学校生活への不安や戸惑いを解消する良い機会となる。毎日 JSL サポート教室を開講するためには，少なくとも学習指導支援者（以下「学習支援者」とする）は 3 名以上必要である。毎日来てもらえるのならば，（週 4 日，週 5 日）もちろんその方がよい。前述した通り、毎年対象生徒の数は一定数以上おり、異学年にまたがっている。JSL 委員会担当者だけでは、時間的に支援を継続していくことは不可能であることは歴然としている。

本校 JSL 委員会では、以上の考えに基づき、2012 年度以降体制を整えるべく少しずつ調整を試みてきた。しかし、①JSL 委員会のメンバー構成が毎年変わることで理解や協力、指導の継続性を得られず、放課後の指導体制をうまく組むことができない、②「JSL」という言葉に先入観を持ち「JSL に参加することは、自分が日本語がうまく出来ないことを公言するようでいやである、友達に絶対に知られたくない」として、本当に支援が必要と判断され、毎年保護者からも相談を受けるような生徒が参加を拒む、③学習支援者に関しても、当初はやはり教員免許を持っている日本語指導や帰国生徒指導に興味のある大学院生が望ましいと考えたが、実は本校の MYP 教育について全く知らない方の場合、生徒に課された多様な形式の課題に学習支援者自身が全く対応出来ず、逆に生徒を混乱させてしまう結果となり、生徒からの信頼を損ねることにつながる、などの課題が新たに生じた。これらの問題の解決の糸口となったのは 2013 年 4 月に 4 回生 4 年生に編入したオーストラリアから生徒 1 名を 2016 年 3 月卒業までの 3 年間の継続支援したこと、2014 年入学した 8 回生 1 名を 2019 年 4 月 6 年生に進級するまでの 5 年間継続支援したというこの 2 つの試行錯誤のサポート経験である。もちろん他の対象者もたくさんいたのだが、この 2013 年から 2019 年までの 6 年間に他の対象者と共にこの 2 人のケースに試行錯誤しながら対応していく過程が現在の「JSL サポーターズ」支援体制を構築することにつながった。

2013 年 4 年生にオーストラリアから編入した生徒の優勢言語は英語である。日本語での学習経験は全くなく、もちろん日本の学校も日本での生活は初めてである。前述の 1 回生の中国からの生徒と大きく違っていた点は、①ひらがなはともかく漢字が全くわからない、カタカナもあやしい、編入時の本人の言葉を借りると「漢字は絵のように見える」「『何がわからないか』がわからない」状態であったこと　②家庭の事情により民間の寮での 1 人の生活をしなくてはならず、身近に勉強を見てくれる家族がいない、学習習慣以前に日本での生活習慣に慣れなくてはならない状況にあることの 2 点である。この生徒に後期課程の科目の単位を取らせるためには、ほとんど毎日時間がある限りの継続支援が必要であるのは明白である。授業を担当する各教科の教員と密に連絡をとり、効率的に学ぶために何から学ばせたら良いかのアドバイスを頻繁に受けながら、できるだけ本人に音読させ、プリントや教科書にふりがなをふらせると共に、つまずいている語句や状況の説明を易しい日本語でする方法で支援を進めた。この指導を行っている 2 年目に、大学で日本語教育を専攻している 2 回生の卒業生の訪問を受ける機会があった。最初は単なるボランティアとして時折手助けをしてもらっていたのだが、ISS の卒業生であることが支援を必要とする生徒たちに大変良い影響を与えた。理由をしては、学習支援者が自分たちの先輩であり、中・高校生の時に同じような課題に取り組んだ経験があること、年齢も近く、学習で困ったことだけでなく行事や ISS 学校生活全般や今後の展望についての話も聞けて気楽に相談しやすいこと、などが挙げられる。この卒業生がボランティアで支援に時々参加することで、JSL サポートを受ける場所が生徒たちにとって単なる教師と勉強するのみの場ではなく、先輩との交流もできる場となり、「ISS」という共通の話題でどん

どん楽しく学べる場になっていく様子を目の当たりにした。

2014 年入学した 8 回生 1 名の母国語は韓国語である。本人は日本語での学校教育を受けた経験がほとんどない。家庭では日常的に韓国語あるいは英語を使用し、日本語の使用は学校においてのみである。入学時は、日本語での授業を多く受けることで、本人に戸惑いと不安が多く見られたが、放課後 JSL サポートを継続して受けることで、その不安の大部分は取り除かれた。この生徒の場合、サポートを受ける際、帰国生徒であろうがなかろうが友達を伴って参加することが多かった。「わからないこと」を一緒にいる友達に確かめる、前述の卒業生ボランティアが来たときは特に、みんなでわいわい声を掛け合って学校のあれこれについておしゃべりをしながら楽しく共に向上すべく勉強していた。自分よりも上の学年の生徒がその場にいるときには積極的に声をかけて遠慮なく助けてもらい、逆に自分と同じように日本語の学習に苦労しているだろう下級生に対しては、自分の体験を生かしながら英語や日本語や時には韓国語を使って手助けをしようとする生徒であった。「日本語がわからないことは決して恥ずかしいことではなく、わからなければどんどん先生や先輩や友達に聞けばいい、友達同士、先輩でも後輩でも互いにわからないことを教え合っていけばいい」というこの生徒の JSL に取り組む姿勢は後期課程に進級しても変わらず、5 年生になる頃には、授業を受ける上で日本語に起因する学習での困り感はほとんどなくなっていた。

この 2 人の事例から、JSL サポート教室は、当たり前だが生徒ができるだけ「気軽に、楽しく」訪れることができる場でなくてはならないという考えにいたった。そこで、学習支援者には、教員免許の有無にかかわらず、本校のことをよく知り、後輩のために役に立ちたいと考える ISS 卒業生や ISS 関係者をできるだけ活用することにした。また、対象生徒が一緒に勉強したいと伴って参加する帰国生徒以外の生徒も積極的に受け入れた。JSL 委員会の教員はもちろん時間があるときには、直接生徒の指導にもあたるが、JSL 委員会の主な役割を、放課後の JSL サポート教室の運営部分、例えば、学習支援者の日程調整、生徒の参加状況の把握、下校指導、学年や教科の先生方との情報のやりとりなどにそのウェイトを移すことにしたのである。

2 章 「JSL サポーターズ」支援体制の現在

統計を取り始めた 2015 年度からの年間の JSL サポート教室の実施日数と利用者の延べ人数は【2015 年度　134 日　405 人】【2016 年度　146 日　478 人】【2017 年度　132 日　299 人】【2018 年度　135 日　515 人】【2019 年度　147 日　296 人（コロナの感染防止で 3 学期は人数を制限して実施)】【2020 年度 109 日　685 人（緊急事態宣言で休校のため 6 月から実施したが、学習の遅れへの不安と部活動が制限されたためか参加人数が大幅に増加した)】【2021 年度（1 月 21 日現在）118 日　468 人】となる。各年度によって、支援対象生徒も生徒のおかれた学校の状況も異なるため、延べ人数にばらつきは見られるが、これらの数字から判断しても、生徒のニーズは確実にあり、JSL サポート教室が支援を必要とする生徒たちの放課後の学びの場として重要な役割を果たしているといえる。JSL サポート教室は、学校行事の関係でどうしても生徒を放課後残すことができない日以外の平日はすべて開講し、学習支援者に来てもらっている。学習支援者は誰でも良いという訳ではなく，教職を目指している、あるいは教職免許を持っている、多文化な背景を持っている生徒に対しての十分な理解がある、国際中等教育学校がおかれている状況に対する理解があることが望ましいと考える。このような条件を前提とし、ここ数年卒業生を中心に学習支援をお願いしている。対象生徒との信頼関係を築く意味でも、長期的、継続的に活動できるのが望ましいが、卒業生の場

合、継続的にできるのはだいたい 1 年~2 年である。サポート指導も誰でもすぐにうまくできるようになるという訳ではないので、できれば，支援者の採用時の大学、大学院の所属学年をずらしたいと考えている。2020 年度から学習支援者は「JSL サポーターズ」として登録し、開講する日は交代で必ず 1 人には来てもらうようにしている。現在登録しているメンバーの構成は、元本校教員 1 名、本校非常勤講師 1 名（3 回生）大学院生 2 名（5 回生）、大学生 5 名（8 回生と 9 回生）の 9 名である。学校の TEAMS を利用し、連絡を取りながら学習支援者の都合を調整し、JSL 委員会の担当教員が日程を組んで実施している。

現在のところ、支援体制は一応順調に進んではいる。この方式がベストであるかどうかはわからないが、「学習指導支援者」として卒業生の協力も得られるようになったことで、以前よりも JSL サポート教室が「気軽に楽しく学べる場」となっているのは確かである。JSL・交流委員会の教員の負担も学習支援者のおかげで、少し軽くなった。たとえ放課後に会議や研究会、部活等があったとしても、JSL サポート教室は「継続的に学ぶ場」として毎日開講できている。担当教員がつきっきりで長時間の指導に携わらなくとも良くなったので、以前のような担当教員が支援の場にいられず、開講できないという事態は避けられるようになった。今後の課題としては、①継続して安定的に卒業生の学習支援者を確保する方法を考えること、できればこれらの学習支援者とは別に、JSL サポート教室専任のコーディネーターがいるのが望ましいこと、②JSL・交流委員会以外の先生方に、支援を必要とする生徒たちの状況の理解を深めてもらうような機会をどんどん作ること、たとえば、定期テスト前には JSL サポート教室に少しでも参加してもらい、テストや準備することの説明を丁寧にしてもらうなどの声かけをおこなうなど、③現在は参加生徒の名前と参加日時を記録するのが精一杯だが、できれば参加生徒の継続的な学習状況の記録を残すこと、④客観的にみると本当は支援が必要なのだけれども、支援は必要がないと思い込んでいる生徒が必ず数人いる。それらの生徒をいかにして JSL サポート教室に参加させるか、学級担任とのより密な連携が必要であることなどが挙げられる。

最後に、本校の開校 5 年目以降、学校の状況の変化に伴い JSL に関わる手続き等でいくつかの点で変更せざるをえなかった事柄もここに記述しておく。①編・入学手続きが郵送に変わったため、それまで行っていた手続き場所での JSL 編入学前事前相談がなくなった。保護者から別途連絡があれば適宜行うこととした。②編・入学手続きの際の言語環境調査の内容を一覧とし、教員が必要に応じて活用できるようにした。③入学後の日本語チェックの時期をカウンセラーの面談と並行して実施することにした。事前に 2 週間ほど授業を受けてからのアンケートを入学者全員にとり、そのアンケートの内容を確認し、特に必要と判断される生徒に対し面談をする形とした。

The Current State of JSL Support at ISS

Abstract

Over the past few years, we have been searching for the best way to support returnee students from overseas who need Japanese language instruction, and as a result, we now have a support system in the form of JSL support classes held every day after school with the cooperation of the "JSL Supporters," a group of graduates and others associated with our school.